

1. 喜多川周之コレクションから見た、盛り場浅草の塔「凌雲閣」浅草十二階 （共同研究会 配布資料） 行吉正一*

はじめに

浅草は、古くから庶民の信仰の場として、また、娯楽の場として栄えた盛り場である。明治時代、この地域は「浅草公園」となったが、その性質は受け継がれ、浅草六区を中心に演芸や映画など、時代の最先端の娯楽を常に提供してきた。

明治時代から大正時代にかけて、その浅草のランドマークであったのが凌雲閣、通称、浅草十二階である。レンガ造りの高塔で、最上階からは関東一円を望むことができた。関東大震災により倒壊するまで、33年間、盛り場浅草のシンボルであった。

その浅草十二階に魅せられ、一生をその資料収集と研究にささげたのが、喜多川周之氏である。石版画工としての生活を送りながら、凌雲閣や浅草を研究し続けた民間学者である。

喜多川周之氏が亡くなられた後、当館は、その資料の多くをご遺族の方からいただいた。現在においても、喜多川周之コレクションは、当館の核になるコレクションとなっている。

今回の報告では、喜多川周之コレクション、盛り場浅草、凌雲閣について概要を紹介する。

1. 喜多川周之コレクション

(1) 収集

○喜多川周之（1911年（明治44）～1986年（昭和61））75歳

○幼い頃から浅草の凌雲閣（浅草十二階）に魅せられ、絵葉書の収集から凌雲閣の研究を始める。また、そこから浅草文化史、東京の地誌へと研究を広げていった。

○喜多川周之氏の没後、1987年（昭和62）、1988年（昭和63）の2年間にわたり、東京都江戸東京博物館は、喜多川氏が収集された資料の多くを受け入れる。

(2) 概要

○総数 約35,000点

○資料の概要

分類	点数	内容
考古	5	
建造物	11	
絵画	559	・凌雲閣や浅草の版画など
書跡	4	

* 東京都江戸東京博物館 学芸員

生活民俗	1, 6 3 2	・ 敗戦後の都内の乗車券 ・ 浅草寺関係の資料 ・ 戦争関係資料
典籍	5 0 3	・ 江戸時代の地誌
文書類	4 9 7	・ 戦争関係の文書
印刷物	2 2, 5 3 5	・ 凌雲閣や浅草のポスターや双六 ・ 新聞 ・ 東京の地図 ・ 浅草の映画、演劇のパンフレット ・ 絵葉書
図書	7, 6 5 4	・ 浅草関係、東京関係の図書、雑誌
音響	9 1	
動画	8	
静止画	5 9 0	・ ステレオ写真、絵葉書、写真帖

これらの資料は、喜多川氏が持っていた資料のほぼすべてであり、喜多川氏が、意識的に凌雲閣や浅草研究のために収集した資料のほかに、参考用資料として収集したもの、調査の段階で作成したノート、喜多川氏自身の原稿や著作物、出演したテレビやラジオの録音録画など、さまざまなレベルのものがあ
る。また、喜多川氏の実生活の中で集まってきたものなども含まれ、喜多川氏が生前持っていたほとん
どすべての「物たち」である。したがって、ひとりの人間の知的活動に関するものが、すべてそのまま凍
結され、それが喜多川周之コレクションになったとすることができる。通常の、ある特定の分野に特化
され、そして精選されたコレクションとは異なる、喜多川周之という人間を色濃く反映した魅力あるコ
レクションなのである。

「読売新聞」(1977年)の記事「喜多川さんの持論はこうだ。本来、歴史は、路地裏からのぞいた浮世
の移り変わりを記述したものなのに、通史や概論ばかりで、個人の生活がすっかり置き忘れている。
私たちの生活は、歴史年表の中で区切られるものではないのだと。「だからこそ、郷土史家が必要にな
るのです。」と喜多川さんは強調する。それも、専門家が手がけるアカデミックな“学問”ではダメ。
あくまで素人の手で、それも中学生が目をは輝かせて読みふけるようなわかりやすい記述でなければなら
ないという。「だれもが、郷土史の中では、歴史の主人公なんです。全員が自分の正史を持ちたいですね。
その時、初めて郷土史の花が満開になるんです。』」

「読売新聞」(1976年9月29日)の記事「私たちは、できるだけ庶民生活に密着したものを集めるよ
うにしました。浮世絵も大事ですが、商店のチラシ、活動写真のプログラムのようなもの、いわば紙
くず文化が、時代の生き証人なんです。飾りも何もないところに庶民の息吹を感じます。(・・・)
今の人は、今の刷り物を大事にしまっておいてほしい。これが先に行けば資料になるんです。」

(3) 喜多川周之仮年譜

□1911年（明治44）

小石川区林町（文京区千石）に生まれる。

□1917年（大正6）6歳

神田猿樂町の錦華小学校に入学する。

□1923年（大正12）12歳

関東大震災にあう。

母はんが亡くなる。

□1927年（昭和2）16歳

石版画工の道に入る。（浅草橋の川村画版所）

□1932年（昭和7）21歳

文芸誌「新進芸術」の刊行にかかわる。

□1934年（昭和9）23歳

本格的に凌雲閣の資料収集を開始する。

□1935年（昭和10）24歳

千代田区淡路町で画版業を営む。

□1936年（昭和11）25歳

石倉アサと結婚する。

□1937年（昭和12）26歳

「大東京風俗資料研究会」を主宰する。

□1945年（昭和20）34歳

空襲により収集した資料を焼失する。

□1952年（昭和27）41歳

妻アサが亡くなる。

*敗戦後～1960年代初頭までの事績不明。

□1963年（昭和38）52歳

「よもやま会」を創設。（浅草文化の研究）

□1968年（昭和43）57歳

「東京百年記念・浅草秋の観光祭 浅草十二階展」（浅草観光連盟主催）に資料出品。

□1972年（昭和47）61歳

千代田区文化財調査員に就任。

□1974年（昭和49）63歳

「千代田郷土の会」を発足させる。

□1975年（昭和50）64歳

台東区郷土資料調査員に就任。

□1978年（昭和53）67歳

NHK朝の連続テレビ小説「おていちゃん」の時代考証を行なう。

□1986年（昭和61）75歳

11月13日、午前11時25分、死去する。

2. 浅草の凌雲閣

(1) 浅草

- 浅草をはじめ、東京の下町地域は、利根川、荒川などの運ぶ土砂が堆積してできた低地で、奈良・平安時代のころ、浅草寺周辺には、集落が形成され「浅草」と言われていた。
- 浅草寺は、飛鳥時代創建の古刹。「浅草寺縁起」によると、^{ひのくまのはまなり たけなり}檜前浜成、竹成という兄弟の漁師が、628年（推古36）、^{みやとがわ}宮戸川（隅田川の古名）で漁をしていたとき、一寸八分（5.5cm）の金製の観世音菩薩像を網で拾得し、兄弟の主人、^{はじのなかつとも}土師中知宅に草堂を作り、奉安したのが浅草寺の草創縁起という。
- 浅草寺本堂裏手の「奥山」は、江戸屈指の盛り場として賑わった。
- 幕府に公認された遊郭、吉原が、明暦の大火後、1657年（明暦3）に浅草寺裏手北方に移転。新吉原。
- 歌舞伎の芝居小屋三座（中村座、市村座、河原崎座）も天保の改革により、1842年（天保13）、浅草猿若町に移転。
- 明治新政府は、1873年（明治6）、各府県に公園設置を指示し、東京府は、浅草寺、寛永寺、増上寺、富岡八幡宮、飛鳥山を公園として整備することを決定した。浅草公園は、1884年（明治17）には、一区から六区までに整備された。
- ことに、第六区は、興行街として、東京における大衆娯楽の代表地となり、「六区」の名は、浅草公園の代名詞となった。

(2) 浅草六区の娯楽、高所高覧の楽しみ（凌雲閣前史）

①海女の体内くぐり

- 1879、80年（明治12、13）ころ、蔵前の厩橋付近にできた高さ三丈（約9m）のハダカ女の大人形。膝の辺りから体内に入り、頭部に窓があり、四方を見渡せる。珍趣味の登高観覧場。

②佐竹っ原の大仏

- 1884年（明治17）、佐竹っ原（台東区台東2～4丁目）に、彫刻家、高村光雲の設計した巨大な大仏の見世物が作られる。

③浅草寺五重塔

- 江戸初期に建てられた浅草寺五重塔は、安政大地震などによる損傷が激しく、大幅な修理が必要とされていた。そこで、明治初期、その修理費用の捻出の一助とするため、五重塔の修理の足場に上がらせて周囲を眺望させ、料金一銭を徴収することとした。この計画はあたり、多くの人々が高所高覧を楽しんだ。修理は、1886年（明治19）9月に完了した。

④富士山縦覧場

- 修繕中の浅草寺五重塔の人氣に目を付けた香具師の寺田留吉が、計画したもの。

○1887年（明治20）11月6日、六区に開業した富士山縦覧場は、富士山を模した高さ約32メートルの木造の富士山で、高所高覧のための有料施設。頂上には望遠鏡も備えつけ、大変な人気を集める。1889年（明治22）8月31日の暴風雨で骨組みだけとなり、修繕を施すが人気は戻らず、1890年（明治23）、開業から3年後、取り壊される。

○富士山信仰に基づいて造られた富士塚が、富士山縦覧場のアイデアの背景にあるかもしれない。富士塚とは、富士講が庶民の間で盛んになった江戸時代、関東地方を中心に数多く作られた富士山を模した塚。

○浅草の富士山縦覧場の成功が、大阪にも刺激を与え、大阪の浪花富士山が、1889年（明治22）9月に開業した。

⑤大阪の眺望閣と凌雲閣

○浅草の富士山縦覧場の成功が契機となり、大阪に高層遊覧場の流行をもたらす。

○眺望閣（ミナミの五階）

今宮村（浪速区の日本橋あたり）に1888年（明治21）7月開業した、高さ約31mの八角形の五層楼閣。「有宝地」という遊園地内に建てられた。

○商業クラブ

「商業倶楽部」は、「今宮商業倶楽部」あるいは「偕楽園商業倶楽部」などと称し、1889年（明治22）3月に開場した。現在の新世界から天王寺公園の一部にかけて約五千坪にも及ぶ敷地を持った総合的な施設で、商業振興のために商品陳列を行なったり、宴会場、入浴場、競馬場などの娯楽施設も有していたようである。洋館5階建ての本部はドームの屋根をもち、最上階は展望台になっていた。

○凌雲閣（キタの九階）

北野村（北区の茶屋町あたり）に、1889年（明治22）4月開業した、高さ約39mの展望台。一部分煉瓦造り。1、2階は、五角形、3階からは八角形で、最上階の9階は、丸屋根のついた展望台。「有楽園」という遊園地内に建てられた。

(3) 凌雲閣（浅草十二階）

①凌雲閣（浅草十二階）

○高所高覧を目的とした有料の娯楽施設。

○1890年（明治23）11月11日、浅草六区の北側（現：東京都台東区浅草2-13-10あたり）で開業した12階建ての高塔。避雷針も入れた高さは、173尺（約52m）。十階までが煉瓦造りで、その上は木造。

○設計者は、帝国大学工科大学の衛生工学の教師、ウィリアム・K・バルトン（William Kinninmond Burton 1856-1899）。発起人は福原庄七。初代社長は写真師でもある江崎礼二（1845-1910）。

○内部には、様々な商店が並び、勧工場に似ていた。開業時には、日本で最初の電動式エレベーターを持ち、最上階には望遠鏡も備え付けられていた。

○1893年（明治26）ころまでが凌雲閣の人気の絶頂。1894年（明治27）6月20日、東京を強震がおそい、凌雲閣は多少損傷し、閣の内外数条の鉄帯で締め付け、一階ごとに鉄ボードを十文字に渡して修繕をした。テラスも崩れ、テラスの「凌雲閣」の文字も失われた。この書の揮毫者は未だ分かっていない。

○さらに、大正時代に入ると、十二階の下は、私娼窟となり、「十二階下」とも呼ばれるようになっていた。

○明治40代になると、十二階の塔上から投身者がでる。

○十二階は、広告塔の役割を負うようにもなる。たとえば、関西の福助足袋は、販路拡張の東京進出で、1923年（大正12）、十二階側面に広告を取り付ける。

○1923年（大正12）9月1日の関東大震災の時に倒壊。

②バルトン（1856年（安政3）～1899年（明治32））

○ウィリアム・K・バルトン（William Kinninmond Burton）。スコットランドのエディンバラに生まれ、ロンドンで上下水道技師として活躍。1887年（明治20）、31歳のとき、疫病の流行に悩む明治政府の招聘に応じ、来日。帝国大学工科大学衛生工学講座の初代教授として、上下水道技師を養成。また、内務省衛生局顧問技師として日本全国の主要都市の上下水道計画の基礎を作り上げる。

○バルトンを日本に招聘したのは、作家永井荷風の父、永井久一郎（内務省衛生局に勤務）。

○また、バルトンは、写真家としても著名で、日本の写真界の振興と技術の向上に大きく貢献した。

③エレベーター

○凌雲閣には、日本初の電動式エレベーターが、1階から8階まで設置されていたが、危険とされ、開設の翌年（1891年（明治24）5月28日）には運転が中止された。後、1914年（大正3）に、再開されている。

④百美人

○凌雲閣にとって、エレベーターは、大きな呼び物であったが、運転停止に追い込まれ、最大の呼び物を失うこととなる。それに代わる企画が「百美人」であった。1891年（明治24）、3階から6階に芸妓百名の写真を掲げ、登覧者の投票によって、さらなる美人を選抜させるというもので、この企画は人気を博し、大成功を収めた。この写真を撮影したのは、写真師、小川一真。

⑤関東大震災

○1923年（大正12）の関東大震災により、凌雲閣は8階から折れ、赤羽工兵隊により爆破撤去される。

おわりに

喜多川周之コレクションをとおして凌雲閣の概要を紹介した。凌雲閣の歴史を見ると、凌雲閣は、明治時代から大正時代の東京の文化、芸術、社会など広い分野に関わっている施設であることがわかる。

したがって、喜多川周之コレクションは、凌雲閣だけではなく、当時の東京全般に関する貴重な資料群であるということができよう。

また、凌雲閣以前の高所高覧施設（「海女の体内くぐり」、「佐竹っ原の大仏」、「浅草寺五重塔」、「富士山縦覧場」）を見ると、どれも宗教的な性質を強く持っていることに気付く。それらの施設においては、宗教性と娯楽性が強く結び付いており、近世以前の形態を強く残しているようである。しかし、凌雲閣になると、そのような宗教的な意味合いはほとんどなくなり、商業資本による経営を第一義とした施設になっている。そのような世俗の塔、凌雲閣は、新しい娯楽施設（活動写真、浅草オペラなど）が浅草に現れると、あっという間に人気が廃れてしまう。凌雲閣は、盛り場浅草のシンボルとしてのみ立ち続けた悲劇の塔といえ、誇張しすぎだろうか。

さて、今後の凌雲閣研究について、また、喜多川周之コレクション研究についての課題を挙げれば次のようなことが考えられる。

- ①凌雲閣の建築面での検証（←残っている資料の限界があり、どこまで可能か？）
- ②盛り場浅草の中の凌雲閣の意味づけ
- ③大阪など他地域の塔との比較による、凌雲閣の特徴の把握
- ④芸術作品（美術、文学など）の中の凌雲閣像
- ⑤喜多川周之コレクションの目録の作成

凌雲閣は、今から120年前の1890年（明治23）に開業し、1923年（大正12）の関東大震災の時に倒壊した塔である。33年間、浅草のランドマークとして建っていたわけであるが、その名前を知る人は今は少ない。しかし、凌雲閣の歴史を検証することにより、浅草の歴史だけではなく、近代都市東京や盛り場の課題が見えてくる。凌雲閣は、さまざまな課題を含み持った魅力的な塔ということができよう。

特に今回は、凌雲閣を大阪の塔と比較することにより、共通点、相違点をあきらかにし、どのような点が、近代の塔において課題となるのかを明らかにしたい。